支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「水まくら」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

二宮金次郎の銅像のある木造校舎を背景にした、私の小学校入学の記念写真である。

私の母は、後列で端の方に着物姿で立っている。パンパンに膨れあがったまーるい顔に太い体で。闘病中の注射などの影響だったらしい。

水まくらの話は入学前年の夏ごろと記憶しているので、翌年の入学時には母は式に出られるほど回復したことになる。

母は、床の間にある座敷のベッドに水まくらをして寝ていた。ベッドとは名ばかりで、それは確か〝そぞみ台〟と記憶している納屋で使う木造の作業台だった。

母は突然の心臓病だったが、一命を取り留め退院し自宅で療養していた。常に微熱と頭痛があったのであろう。後年もしばしば頭痛で、朝ご飯の支度をした後、布団に戻った。

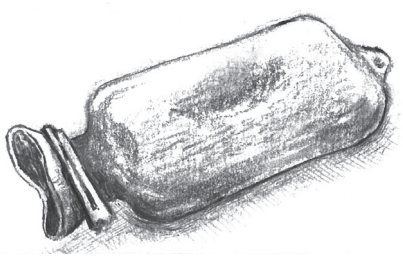
家族が田畑に出るため、就学前の私がベッドの脇に小さな机をあてがわれ〝付き添い〟、水まくらの水交換が日課だった。

母から水交換の要求はあまりなく定期的に私が言い出し、水まくらを持って縁側から庭に降り、井戸の脇の水道で水を入れた。水を入れてすぐ口を閉じると空気も入り、パンパンとなる。そこで、まず多めに水を入れ、閉じ金具で軽く口を挟み、入った水を少し出しながら閉じると、うまくいった。

頭を乗せたとき、なじむ程度のまくらの柔らかさが肝心で、私は何度も失敗して要領を覚えたのだろうが、私が「どう、いいがあ」と言うと、母は「あーあんべ（塩梅）いい」と返してくれた。

母にあまり笑顔はなかった。微熱が続いていたためだろうが、今思えば、農家に嫁ぎながら、家族は田畑に出て汗水垂らしながら働き、自分は座敷で横たわっている、そのやるせなさが顔をそうさせたのだろうと思う。

年々セピア色が濃くなる記憶の中で、緑色の蚊帳の中にある、ベッドと小さな机の風景と、あの水まくらの赤茶色は、色あせない。



●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める